

アカデミック・ライティング・スキルの学習状況と困難点 —日本語教員を目指す学生のライティング指導カレディネス調査として—

副田 恵理子

1. はじめに

近年、在留外国人・日本語学習者の増加や多様化を踏まえ、日本語教育を支える教員の養成・研修の充実が求められている。文化審議会国語分科会が2019年に取りまとめた「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版」では、日本語教育人材の多くを占める「留学生に対する日本語教育人材」の課題を指摘する中で、「進路を想定した中級・上級レベルの指導法や技能別指導方法も、現場においては必要となることから、養成段階において習得させることが求められる（p.13）」と書かれている。しかし、大学の日本語教員養成課程の授業や教育実習においては、時間的な制約のため初級の指導法を扱うことが中心となり、中級・上級レベルや話す・聞く・読む・書く4技能それぞれの指導法は十分に扱われない傾向がある。特に4技能の中でも書く（ライティング）指導に関しては、その指導力をどのように養成するかについて今まであまり議論がされてこなかった。第二言語（以下、L2）ライティングの指導は、表記・語彙・文法など言語の形式面に着目し、L2で正確に適切に書けるように指導することも重要であるが、加えて、適切な内容と構成により読み手に伝わる文章を書けるように指導することも必要である。つまり、日本語力とライティング・スキルの双方の習得を目指さなければいけない点で指導が難しい。今後はその指導力養成のために、教員養成においてどのような指導が行われるべきか十分な検討が必要である。

先行研究からは、L2教員のライティング指導には教員自身の母語とL2両方のライティング経験、リテラシー学習の経験が大きな影響を与えることがわかっており（Yigitoglu & Belcher 2014）、教員自身が十分なライティ

ング・スキルを習得していることが重要だと思われる。そのため、本学日本語教員養成課程でL2ライティング指導力を養成するためには、まず、日本語教員を目指す学生自身がどの程度ライティング・スキルを身につけているのかを明らかにするレディネス調査が必要であると考えた。本研究では、特に幅広いライティング・スキルが求められるアカデミック・ライティング（以下、AW）に着目し、AWスキルの学習状況を調査する。

そこで、本研究は以下の2点を明らかにしたい。

- (1) 大学生はAWスキルをいつどのように学習しているのか。
- (2) AWスキルの何が難しいと考えているのか。

この結果を踏まえ、本稿では日本語教員養成課程においてライティング指導力養成のためにどの段階でどのような内容が扱われるべきなのかを検討する。加えて、大学におけるライティング学習の現状を明らかにすることで、初年次教育、AW教育に何らかの示唆を与えられればと考える。

2. 先行研究

2.1 大学のライティング教育に関する先行研究

1990年代以降、大学のユニバーサル化が進行し、学生の基礎学力の低下が指摘されるようになり、大学初年次教育の一環として「文章表現入門」「日本語表現法」などのライティングを扱う授業が急速に増えていった（井下 2008）。大学のライティング教育研究については、初年次教育を中心に様々な実践報告があり（大場・大島 2016）、近年では、高大接続を取り上げ、高校で何を学んできているのか、大学初年次ライティング教育において何が指導されるべきかを明らかにしたもの（渡辺・島田 2017；春日他 2021）、大学内での専門教育との連携に関するもの（石黒 2018）、ライティングセンターなどライティング支援の取り組みを明らかにしたもの（佐渡島・太田 2013；関西大学ライティングラボ・津田塾大学ライティングセンター編 2019）などが見られる。

しかし、大学生が習得しているAWスキルについて調査した研究は少

ない。近藤・中村・向井（2017）は、大学初年次の学生217名を対象にライティング経験に関するアンケート調査と作文課題を実施し、彼らが大学入学までに習得しているライティング・スキルを明らかにしている。その結果、AWに求められる「演繹型」の構成は意識されているものの、主張に対する根拠を提示する際に、自分の信念や経験、世間での常識を提示している例が多く見られ、客観性に欠けていたことを明らかにしている。この結果を踏まえ、近藤（2021）は、「演繹型」の構成についてはある程度習得されているものの、さらに字数の多いレポートや論文に対応できるような構成を指導すること、根拠として客観的なデータを使用するよう指導すること、論展開に即した外部資料の適切な文章内への取り入れ方について指導することが、初年次ライティング教育において必要であると述べている。

2.2 L2ライティング教育に関する先行研究

近年、L2ライティング教育研究では、教師や教師教育に焦点を当てた研究が急激に増えている。Lee（2021）は、これは世界的に学生のライティング能力に対する懸念が広がっているため、効果的なライティングの教え方やライティング教員育成を模索することが不可欠になっているからだろうと述べている。そして、有効なライティング教員養成を行うためには、ライティング教師の認知、つまり、教師が何を知り、信じ、考え、どう行動しているのか理解することが重要であるとしている。日本語のL2ライティング教育研究においても、この数年教師を対象にした研究が増えており、日本語教師のピリーフを調査したもの（中島・村岡 2021；阿部他 2022）、指導に対して感じる不安について検証したもの（布施 2020）などが見られる。

一方で、L2ライティング指導力の養成・研修という観点からの研究はまだ少ない。日本語教員を目指す大学生に着目した調査には坪根・鎌田（2022）、鎌田他（2022）がある。坪根・鎌田（2022）は、日本語教員養成

課程の大学生3名を対象に PAC 分析⁽⁴⁾を実施し、ライティング指導に対して感じる難しさについて明らかにしている。3名は難しい点として「文法」「語彙・表現」「表記」について言及していた一方で、「内容」「構成」に対してはほとんど言及がなかった。この結果を踏まえ、養成課程において、「内容」「構成」の観点から書く力を伸ばすことに対する意識付けを行う必要があると述べている。また、このような意識は協力者自身の学習経験から影響を受けていたことも明らかにしている。

鎌田他（2022）は大学生がライティング指導に関して感じる難しさについて量的な調査を実施している。65名の大学日本語教員養成課程受講生を対象に難しさの度合いを5件法で尋ねるアンケート調査を実施し、ライティング指導経験5年未満の教師との比較を行った。その結果、大学生は「添削」「学習活動」「書くことに対する抵抗感の軽減」「評価」「学習者の自発性・主体性」に加え、「文章構成」「言語表現」といったAWに関係する項目の指導について難しさを感じていることがわかった。この結果を踏まえ、養成課程の大学生自身が論文やレポートのような文章に習熟し、AWで求められる適切で十分な知識を持てるように指導することが必要であろうと述べている。

これらの研究からも、教員養成課程の大学生のL2ライティング指導に対する意識は、彼ら自身の知識や学習経験から影響を受けていることがわかる。それ故に、L2ライティングの指導力を養成するためには、まず大学生自身のAWに関する知識やスキルを把握しておくことが重要だと言えるだろう。

3. 調査概要

3.1 調査協力者

文学部に在籍し日本語教員養成課程を受講している4年生5名から協力を得た。表1のように5名全ての学生が4年次までに「文章表現」や「日本語表現法」といったAWを扱った授業の受講経験があった。また、本研

究では卒業論文作成過程を振り返りながら、そこで必要となるAWスキルについて聞いたため、卒業論文のテーマの分野も表1に記しておく。

表1：調査協力者のAWに関する授業の受講歴と卒業論文の内容

	協力者A	協力者B	協力者C	協力者D	協力者E
AWに関する授業の受講歴(授業名)	2年次： 文章表現	1年次： 文章表現	1年次： 文章表現	1年次： 文章表現 3年次： 日本語表現法 日本語表現法	3年次： 日本語表現法
卒業論文テーマ	西洋史・哲学	マスコミ学	社会学・ジェンダー論	社会学・経済学	社会学・国際関係論

3.2 調査方法

卒業論文は長い文章の中で根拠に基づき自分の主張を論理的に組み立てる必要があり、より幅広いAWスキルが求められる。そこで、本調査では、卒業論文作成終了後にその作成過程を振り返りながら、その中で必要となったAWスキルを挙げてもらい、それらをいつどのように学んだのか、論文作成の際に困難を感じたのはどの点だったのかを尋ねた。

調査は、卒業論文作成の過程の記憶が明確に残っている卒業論文作成終了直後の2021年1～2月に行った。1時間程度の半構造化インタビューをオンライン（Zoom）により実施し、調査協力者の許可を得てそれを録画した。インタビューでは、卒業論文を作成するための準備段階も含めその過程をたどりながら、本研究の目的(1)を明らかにするために次の(a)(b)を、目的(2)を明らかにするために(c)(d)を尋ねた。

- (a) 卒業論文を書くにあたりどのようなスキルが必要だったか。
- (b) それぞれのスキルをいつどのように学習したか。
- (c) 卒業論文を書く際に難しかった点は何か。
- (d) 卒業論文を書くにあたりもっと学んでおきたかった点は何か。

分析にあたっては、インタビューの音声データのみを利用し、トランスクリプトを作成した。そして、調査協力者の発話を対象にAWスキルの内容、学習方法、それに対する意識の3つの観点からコーディングを行

い、質的に分析した。

4. AW スキルの学習状況と困難点

4.1 調査協力者の AW スキルの学習状況

卒業論文を作成するプロセスをたどりながらそれぞれの段階で必要となったスキルを聞いたところ、論文を書き始める前の段階で必要になるスキルと、書き始めてから必要となるスキルの双方が明らかとなった。また、それぞれのスキルをどのように学習したのかを聞いたところ、「『日本語表現法』や『文章表現』といった AW を扱っている授業で学習」「その他の授業で学習」「書籍で自ら学習」「他者の文章を見ることで学習」「卒業論文作成を通して学習」の5つに分けられた。なお、ここで挙げられた AW スキルの多くが、AW を扱っている授業やその他の授業で扱われているものと思われるが、本研究では、調査協力者がそのスキルを特に学習したと意識している方法を明らかにしている。

次に、各協力者の学習状況と困難に感じた点、更に学習が必要だと感じた点をまとめる。

4.2 調査協力者 A の学習状況と困難点

調査協力者 A の AW スキルの学習状況と困難点を表 2 にまとめた。太字ゴシック体の項目は難しいと感じている点、下線の引いてある項目は更に学習が必要だと述べている点である。調査協力者 A は、主にゼミの授業と他者の文章、卒業論文作成を通して AW スキルを学んだと考えていることがわかる。中でも卒業論文作成の際には多くの AW スキルを学んでおり、「他者と自分の意見の書き分け」「事実・根拠の提示」のような論理的な文章作成に必須となる項目もここで学んだと述べている。

難しいと感じた点について尋ねたところ、「先行研究整理」と「情報の取捨選択」について言及していた。しかし、「先行研究整理」については次のように述べており、自ら対処法を見いだしている。

表 2：調査協力者 A の AW スキルの学習状況と困難点

	AW の授業	その他の授業	書籍で学習	他者の文章	卒業論文作成
書く前に必要となる AW スキル		<ul style="list-style-type: none"> ・文献検索 ・文献読解 (ブックレポート) 			<ul style="list-style-type: none"> ・先行研究整理
書く際に必要となる AW スキル		<ul style="list-style-type: none"> ・文章構成 (情報の配置) ・引用 		<ul style="list-style-type: none"> ・文章構成 ・<u>文章表現</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報の取捨選択 ・他者と自分の意見の書き分け ・引用 ・事実・根拠の提示 ・体裁 (脚注、年号の書き方)

*太字ゴシック体：難しいと感じた点 下線：更なる学習が必要だと考えている点

「本当にちっちゃい百均のメモ用紙みたいなサイズの紙をいっぱい作って、そこに例えば、○○○、○○○とか書いておいて差しておく。あとは、○○○は何かかんとかと述べているとか書いて、差しておくっていうのをやってって。」

この方法により、先行研究について幅広く読み、情報の整理はできていたようである。しかし、書き始めてから加筆すべき新たな観点到気づき、その情報の取捨選択に苦労したと述べている。

さらに学習が必要だと感じている点については「文章表現」を挙げている。この点については、次のコメントから他者の文章を読む機会を得ることにより、自らの表現について気づきを得ていることがわかる。

「読みづらいんですね。私が勝手にライバル視してる、その○○の子の論文とかは、1文が簡潔で、とっても分かりやすくまとまって、なんて読みやすいんだろうというリズム感でできているんですけど」

以上のように、調査協力者 A は、卒業論文作成の際に「他者と自分の

意見の書き分け」「事実・根拠の提示」を含む様々なAWスキルを学んでいることがわかった。また、多くの情報をベースに書かなければいけない卒業論文特有の「先行研究整理」「情報の取捨選択」に難しさを感じているが、卒業論文作成を通して対処方法を見いだしている。「文章表現」については、他者の文章を読むことが簡潔に文を書くことに関する気付きや学びにつながっていたようである。

4.3 調査協力者Bの学習状況と困難点

調査協力者Bの学習状況と困難点は表3の通りである。調査協力者Bは、卒業論文作成前に様々な授業や他者の文章を通してAWスキルを学んでいたが、論理的な文章作成に必要な「他者と自分の意見の書き分け」「根拠の提示」については論文作成を通して学んだと述べている。

表3：調査協力者BのAWスキルの学習状況と困難点

	AWの授業	その他の授業	書籍で学習	他者の文章	卒業論文作成
書く前に必要となるAWスキル		・文献検索 ・文献読解 (キーセンテンスの探し方)			
書く際に必要となるAWスキル	・パラグラフ・ライティング ・要約 ・ <u>引用</u>	・引用 ・論文特有の表現		・文章構成	・文章構成 ・他者と自分の意見の書き分け ・根拠の提示 ・体裁(脚注の入れ方)

*太字ゴシック体：難しいと感じた点 下線：更なる学習が必要だと考えている点

書く前の段階の「文献検索」「文献読解」、書く際に必要となる「引用」は卒業論文作成前に授業で学んでいるものの、難しい点として挙げている。「文献検索」については、マイナーなテーマのため幅広く十分な文献を検索ができなかった点を挙げており、「文献読解」については、次のように言い回しの難しさから理解できず、頭に入ってこなかったと述べている。

「日本語でも割と、言い回しが難しいとよく分かんないところも、結構、あったんですけど。(中略) ○○について書いてる文献もいくつかあったんで、全部見たんですけど、どれ見ても、多分、自分がもう、結構、受け付けないのか分かんない、全然、入ってこなくて。」

「引用」については以下のように述べており、間接引用の際の言い換え・要約や、「引用」に関連して「他者と自分の意見の書き分け」が難しいと考えていることがわかる。

「めっちゃめっちゃ苦労はしてて、それこそ、剽窃みたいになっちゃうっていうので、間接引用するときとかも、私的には、結構、まとめて書いてるつもりなんですけど、変わってないっていうので、言われて。提示の仕方もある他人の意見なのに自分ばく書いてしまっているところが、結構、あったっていうのは言われて。」

また、「引用」については次のようにも述べており、レポート作成の際には問題にならなかったものの、卒業論文作成の中で初めて問題になったことを明らかにしている。

「今まで結構、期末レポートとかいろんな授業で出してはいたんですけど、それで剽窃になっちゃうとか、そんな引つ掛かったこともなく全然書いてはいたので、この卒業論文に関してすごいもう先生から言われて」

以上のように、調査協力者 B は、論理的な文章作成に必要な「他者と自分の意見の書き分け」「根拠の提示」を、協力者 A と同様、卒業論文作成を通して学んだと述べている。難しいと感じた点については、授業で学んでいるものの、書く前に必要となる「文献検索」「文献読解」、書く際に

必要となる「引用」を挙げている。加えて、引用に大きく関わる「他者の意見と自分の意見の書き分け」についても難しさを感じていた。適切な「引用」についてはレポート作成の際には問題にならなかったものの、卒業論文作成の際に担当教員より指摘を受け、難しさを感じるようになり、更なる学習が必要だと考えていることがわかった。

4.4 調査協力者 C の学習状況と困難点

調査協力者 C の学習状況と困難点は表 4 の通りである。「文章構成」「文章表現」「引用」「参考文献の書き方」を様々な授業や他者の文章、卒業論文作成を通して繰り返し学んでいる。

表 4：調査協力者 C の AW スキルの学習状況と困難点

	AW の授業	その他の授業	書籍で学習	他者の文章	卒業論文作成
書く前に必要となる AW スキル		・ <u>調査方法・分析方法</u>			・ <u>文献（先行研究）検索</u>
書く際に必要となる AW スキル	・ <u>引用</u> ・ 参考文献の書き方	・ <u>文章構成</u> (結論ファースト) ・ <u>引用</u> ・ 参考文献の書き方		・ <u>文章構成</u> (各章の繋がり) ・ <u>文章表現</u>	・ <u>文章構成</u> (結論は一行目、1 段落内には 1 つの情報) ・ <u>文章表現</u> (同じ表現を繰り返さない)

* 太字ゴシック体：難しいと感じた点 下線：更なる学習が必要だと考えている点

調査協力者 C は調査論文を作成しており、書く前の段階で必要となるスキルである「調査方法・分析方法」「文献（先行研究）検索」を難しい点、更なる学習が必要だと感じている点として挙げている。調査協力者 C は卒業論文を書く前にも調査報告レポートを書いた経験があるものの、卒業論文でインタビューデータを細かく分析していく際に、調査方法や分析方法について経験不足であると感じたと述べている。また、「文献（先行

研究) 検索」については、次のように関連して調べておくべき観点などを
知っておきたかったと述べている。

「先行研究レビューで取り上げるべき要素みたいなのが、最初からそ
ういうものがあるのであれば知っておきたかったなって。例えば、数
字的なデータだったり今ある意見とか、こういうジャンルで派生して
調べておくとかみたいなやり方じゃないですけど、そういうのがあれ
ばやりやすかったかなとは思いますが」

書く際に必要となる AW スキルについては、「文章構成」「文章表現」
を難しかった点として挙げている。「文章構成」は授業で学習したもの、
卒業論文という長い文章を組み立てていく中でパラグラフ・ライティング
²⁾と章・節の繋げ方に難しさを感じていたようである。

「段落の中で 1 行目に結論を持ってくるっていうところと、その段落
内では一つの情報しか入れないってところは、論文の書き方の基
本だと思んですけど。どうしても複数のこと言っちゃったりとかし
てたので、そこは卒論を通して学んだなと思います。」

「先行研究レビューを書くときに、その中でもさらに 2-1-2 とか 2-2-
1 みたいなっていう分け方してるんですけど、それぞれ別のこと言っ
てるから章を分けてるのに、やっぱりそれぞれの章から次の章へ行く
ときのつながりは流れとして必要っていうのは、先生にも言われてい
ましたし。ゼミ内で読み合う中でそこは結構言ってたんですけど。そ
れは分かるんですけど、どう持っていけばつながるのかっていうのが
書く構成的な部分では難しかったです。」

「文章表現」については次のように述べており、これも長い文章を書く

ことが求められる卒業論文特有の難しさといえよう。

「論文書く上で同じ言い回しを使わないっていうのを言われてたんですけど。毎回毎回、考えられるとか、同じ接続詞とか繰り返して。それがやっぱり言い換えるのが難しかったですけど。」

「引用」については次のようにコメントしており、学んでおきたかった点としてあげている。

「自分の言葉でまとめられる部分はまとめるっていうのを、割と卒論の最後のほうに言われたりして、結構ゼミ内でも直す人多かったので、引用だけじゃなくて、自分の言葉で変えられるものは変えてもいいんだっていうところとかは確かに最初から分かっていれば、もうちょっと意識してまとめようっていうのはあったかもしれないですね。」

上記コメントに対して、直接引用を間接引用にすることを指導教員に求められたのか尋ねたところ、間接引用の場合にもそのまま著者の言葉を利用するのではなく、自分の言葉でまとめるように指導されたと述べており、適切な言い換え、要約ができていなかったことがわかった。

以上のように、調査協力者Cは、「調査方法・分析方法」「文献（先行研究）検索」に加え、「文章構成」についてはパラグラフ・ライティングと章・節の繋げ方、「文章表現」については表現の重複の回避に難しさを感じていた。また、「引用」については授業で学んでいるものの、間接引用における適切な言い換え（パラフレーズ）・要約についてもっと学んでおきたかったと考えている。これらのスキルはどれも、多くの情報やデータを整理して細かく分析し、その内容を長い文章の中で適切にまとめていくことが求められる卒業論文特有のスキルだといえよう。

4.5 調査協力者 D の学習状況と困難点

調査協力者 D の学習状況と困難点は表 5 の通りである。調査協力者 D は、授業や他者の文章、卒業論文作成に加え、ゼミで紹介されたレポートや論文の書き方に関する書籍を通して、様々なスキルを学んでいることが特徴的である。

表 5：調査協力者 D の AW スキルの学習状況と困難点

	AW の授業	その他の授業	書籍で学習	他者の文章	卒業論文作成
書く前に必要となる AW スキル			<ul style="list-style-type: none"> ・文献検索 ・文献読解 		<ul style="list-style-type: none"> ・テーマの焦点化
書く際に必要となる AW スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・文章構成 (アウトライン) ・文章表現 ・引用 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章構成 (アウトライン) ・文章表現 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章構成 ・文章表現 ・引用 ・体裁・レイアウト 	<ul style="list-style-type: none"> ・参考文献の記載方法 	<ul style="list-style-type: none"> ・視点 (批判的視点) ・文章表現 ・引用 ・意見提示 ・<u>体裁</u>

* 太字ゴシック体：難しいと感じた点 下線：更なる学習が必要だと考えている点

調査協力者 D は書く前の段階では、以下のように「テーマの焦点化」に難しさを感じている。

「〇〇で絞ったんですけど。全体のことから広過ぎて、どこからどこに攻めればいいのかっていうのが決められなくて。」

書く段階では「文章表現」「引用」に難しさを感じており、これらは授業で学んでいるものの、読みやすい表現で書くこと、間接引用・直接引用の選択に難しさを感じたとコメントしている。

「書いてる段階で文章を読み返して、読みやすいかなっていうのをすごい追及しちゃう」

「参考文献として書くときに、こういうことを言っていたというのがちょっと長くなっちゃったりすると、そのまま抜き出して引用にしたほうがいいのか、自分の言葉で書き換えてのほうがいいのか」

間接引用・直接引用の使い分けの基準について質問したところ、以下のよう
に長さ自身との理解の度合いを踏まえて選択しているようである。

「結構、長くなったところ。丸々、3文くらいとかを抜き出したいときには直接にしました。(中略)1文とかしかなかくて。1文とかしかなかるときと、あとはその人の、書いてる人の言いたいことがはっきり、こういうことだとなって分かるときには間接引用で書きました。」

また、「文章構成」も授業で学習した経験はあるが、アウトラインの作り
方についてもっと学んでおきたかったと述べている。

「アウトラインの作り方を、もうちょっと教えてもらえてたら書きやす
かったかなと。」

「体裁・レイアウト」については、文書作成ソフト Word の機能を利用
したレイアウトの整え方について難しさを感じ、学んでおきたかったと述
べている。

以上のように、調査協力者 D については、「文章表現」「引用」「文章構
成」は授業や書籍で繰り返し学んでいるものの、読みやすい表現で書くこ
と、間接引用・直接引用の選択、アウトラインの作り方に難しさを感じた
り、さらに学んでおきたかったと感じたりしていた。加えて、書く前の段
階の「テーマの焦点化」、書き始めてからの「体裁・レイアウト」の整え
方にも難しさを感じていた。

4.6 調査協力者Eの学習状況と困難点

調査協力者 E の学習状況と困難点は表 6 の通りである。

表 6：調査協力者 E の AW スキルの学習状況と困難点

	AW の授業	その他の授業	書籍で学習	他者の文章	卒業論文作成
書く前に必要となる AW スキル		・文献検索 ・文献読解			・テーマの焦点化 ・ <u>文献の選択</u>
書く際に必要となる AW スキル	・ <u>文章構成</u> ・ <u>情報の取捨選択</u>	・ <u>文章構成</u> ・ <u>引用</u>		・ <u>文章構成</u> ・ <u>引用</u>	・ <u>文章構成</u> ・ <u>文章表現</u> ・意見の提示

*太字ゴシック体：難しいと感じた点 下線：更なる学習が必要だと考えている点

書く前段階においては、以下のコメントのように「テーマの焦点化」に難しさを感じていた。

先生に「最終的にどういうふうにかきたいの」って何回も聞かれて。自分でも、情報少ないのもあったんですけど、どういうふうにとめていっていいのか分からなくなって。

また、「文献の選択」については信頼できる偏りのない文献を選び出すことが難しかったと述べている。

書く段階については、「文章構成」「引用」について授業で学んでいるものの、アウトラインに肉付けしていく書き方、直接引用・間接引用の選択、間接引用の書き換え（パラフレーズ）に難しさを感じ、もっと学んでおきたかったと述べている。

「最初アウトライン書いて、文章を肉付けしていってみたいな感じだったんですけど、私それ初めて聞いて。」

「どのぐらいの文字数でどの引用が使えるのかとか、毎回自分で判断したので、そこは練習しておきたかったかなと思いました。」

「この参考文献の文章は自分でまとめたの？」って聞かれて、「いや、このとおりに書いてあったんですよね」って言って。「それやばくない？」って。

「情報の取捨選択」についてもAWの授業で学んだものの難しさを感じており、下記のようにコメントしている。

「それでも結構先生にこの情報いらないよって削れた部分があって。他の、私より短く書いてる人はいるやつといらないやつちゃんと消してたと思うんですけど、私は、これも一応いるかなみたいなの。」

調査協力者Eは最後まで情報を削ることができず、文章量が増えてしまい、その点が「文章表現」の難しさにもつながってしまったようである。「文章表現」については、長い文章を適切な日本語で書き続けること、それを読み直して推敲を繰り返すことに難しさを感じたと述べている。

以上のように、調査協力者Eは、書く前段階では「テーマの焦点化」「文献の選択」に難しさを感じていたようである。書く段階では「文章構成」「引用」は授業で学んでいるものの、アウトラインに肉付けしていく書き方、直接引用・間接引用の選択、間接引用の言い換え（パラフレーズ）に難しさを感じ、もっと学んでおきたかったと述べている。加えて、情報を削ることや適切な日本語で長い文章を書き続けること、それを適切に推敲することにも難しさを感じていた。

5. 考察

以上、調査協力者5名のAWスキルの学習状況と困難点を見てきた。学習状況については、「文章構成」「文章表現」「引用」は卒業論文作成前にAWを扱った授業やゼミなどの授業、書籍、他者の文章を読むことを通して、繰り返し学ぶ機会を持っていることがわかった。これらの3項目は、他の学生の書いたものを読むことで学んだというコメントが複数の学生から聞かれ、ピア活動によって他者の文章から気づきを得ることの重要性を示唆するものといえよう。

一方で、「他者と自分の意見の書き分け」「事実・根拠の提示」などの論理的な文章に必要なスキルは卒業論文を通して学んだと述べており、卒業論文作成前にも様々な授業で扱われているものと思われるが、それが十分に認識されていない可能性がある。

次に、難しさを感じた点については、多くの情報をベースに書かなければいけない卒業論文特有の「テーマの焦点化」「先行研究の整理の仕方」「情報（文献）の取捨選択」を挙げている。これらは卒業論文作成前の授業で扱われることは少なく、卒業論文作成時に適切なサポートが必要だといえる。

「文章構成」「文章表現」「引用」については、先述の通り繰り返し学習しているものの、以下の点で難しさを感じている。

文章構成：アウトラインの作り方、各パラグラフの書き方、各章の繋げ方

文章表現：簡潔な文の書き方、読みやすい表現、表現の重複の回避

引用：間接引用・直接引用の使い分け、他者の意見と自分の意見の書き分け、間接引用における適切な言い換え・要約

また、これらの点について、レポート作成時は困難を感じなかったものの、卒業論文作成時に初めて問題になったというコメントも見られた。「文章構成」は、授業で扱う際やレポートを書く際にはそれほど長い文章を書く必要がないため、比較的簡単な構成で書くことが可能であるが、何章にもわたる卒業論文作成時に特有の問題点として提示されたといえよ

う。「文章表現」については、レポート・論文特有の表現については学んでいるようだが、長い文章を書く際には、簡潔で読みやすい文章の書き方、表現の重複の回避などが問題になっているようである。「引用」については、間接引用・直接引用それぞれの書き方は学んでいるようだが、文脈や目的に応じた適切な引用方法の使い分けはあまり学習できていないようである。特に文字数によってどちらを選ぶか判断すると考えているコメントが複数見られたことから、目的に応じた適切な引用ができていなかったことがわかる。また、間接引用における言い換え（パラフレーズ）・要約も難しい点として提示されていた。

5. 大学教育への示唆

以上の結果を踏まえ、まず日本語教員養成課程におけるライティング指導力の育成についての教育的示唆を述べる。卒業論文作成前と作成後では習得しているライティング・スキルは大きく異なる。そこで、日本語教員養成課程においてライティング指導を扱う際には、その違いを考慮に入れ、それぞれの段階で何をどう扱うべきか検討が必要である。特に、卒業論文作成前は論理的に書くための「他者と自分の意見の書き分け」「事実・根拠の提示」は十分に習得されていない可能性がある。また、「文章構成」「文章表現」「引用」については繰り返し学んでいるものの、より長い文章を適切に書くためのスキルを十分に習得しているとは言えない。そこで、卒業論文作成前にライティング指導について扱う際には、これらに関する基礎的な知識を導入することから始める必要がある。

Yigitoglu & Belcher(2014) や Lee(2021) は、ライティング教員養成コースにおいて、受講生に自らのライティング経験を振り返らせたり、互いのライターとしての信念や経験を共有させたりすることが、より効果的なライティング教育を実践するために役立つと述べている。そこで、学生自身の書き手としての経験を内省することで、どのような内容を扱うべきなのか、それをどのように指導すべきかを考えさせることも重要だと言えるだ

ろう。

大学におけるAW教育への示唆は次の3点である。先述したように、論理的な文章の作成に欠かせない「自分と他者の意見の書き分け」「事実・根拠の提示」は大学1～3年次のレポート作成にも求められるスキルだと思われる。しかし、卒業論文作成前には十分な習得が行われていない可能性があり、初年次教育からその重要性を意識させる必要があるだろう。

「文章構成」「文章表現」「引用」は様々な授業で扱われているが、長い文章を簡潔にまとめるための論理構成、簡潔でわかりやすい表現、論文でよく使用される表現のバリエーション、目的に応じた間接引用と直接引用の使い分け、間接引用における適切な要約・書き換え（パラフレーズ）などに難しさを感じているようである。これらの項目は、初年次教育から繰り返し学習が必要である。

さらに、卒業論文作成自体がAWに関する多くのスキル習得や気づきにつながっていることから、一つのテーマについてある程度の長さのある文章を書くプロセスを体験することが、AWスキルの習得には重要であることも明らかになったと言えるだろう。

5. まとめと今後の課題

本稿では、大学生が卒業論文作成に必要となるAWスキルをいつどのように学習しているのか、また、その中のどの点に難しさを感じているのかを明らかにした。本研究は5名を対象とした質的研究であり、一般化することは難しいが、卒業論文作成前には、論理的な文章を書くために必要なAWスキル、長い文章作成に求められる論理構成や表現のバリエーション、目的に応じた引用が十分に習得されていない可能性がある。そのため、日本語教員養成課程でライティング指導について扱う場合には、その点を考慮に入れる必要があるだろう。

本研究では、AWスキルの学習状況のみで、それがどの程度実際に習得されているのかまでは明らかにできなかった。今後はそれぞれの項目に焦

点を当てて、どの段階でどの程度まで習得が進んでいるのかを踏まえた上で、ライティング指導力の養成のための内容と方法を検討していきたい。

注

- (1) 「PAC (Personal Attitude Construct、個人別態度構造) 分析」とは、内藤 (2002) により発明・開発された研究法で、質的分析とクラスター分析を組み合わせ、個人ごとに態度・イメージ構造を測定する方法である。
- (2) 「パラグラフ・ライティング」とは、一つの主題文とそれを補足・説明するための複数の指示文からなるパラグラフ (段落) を、論理的思考の筋道に沿うように組み立てて文章を作っていく方法のことである (渡辺・島田 2017)。

付記・謝辞

本稿は2022年3月16日に開催された「第28回大学教育研究フォーラム」において発表した内容を加筆修正したものである。また、本研究はJSPS 科研費 (課題番号 20H01270) の助成を受けたものである。調査にご協力くださいました方々に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 阿部新・中島祥子・村岡貴子 (2022) 「中国の大学における日本語専攻の学生と教員が抱くライティング学習と教育に関するピルーパー学生と教員の違いを中心に」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』26, pp.73-84
- 井下千以子 (2008) 『大学における書く力考える力—認知心理学の知見をもとに—』東信堂
- 石黒圭 (2018) 「専門教員との連携を活かしたアカデミック・ライティング能力育成の試み—法学部新入生を対象にした導入ゼミナールを例に

- 一」村岡貴子・鎌田美千子・仁科貴久子（編）『大学と社会をつなぐライティング教育』くろしお出版, pp.117-135
- 大場理恵子・大島弥生（2016）「大学教育における日本語ライティング指導の実践の動向—学術雑誌掲載実践報告のレビューを通じて—」『言語文化と日本語教育』51, pp.1-10
- 春日美穂・近藤裕子・坂尻彰宏・島田康行・根来麻子・堀一成・由井恭子
渡辺哲司（2021）『あらためて、ライティングの高大接続—多様化する
新入生、応じる大学教師』ひつじ書房
- 鎌田美千子・坪根由香里・副田恵理子・脇田里子（2022）「日本語教員養成課程の大学生が感じるライティング指導の難しさ—ライティング指導5年未満の日本語教師との比較を通して—」『アカデミック・ジャーナル』14, pp.9-16
- 関西大学ライティングラボ・津田塾大学ライティングセンター（編）
（2019）『大学におけるライティング支援—どのように〈書く力〉を伸ばすか—』東信堂
- 近藤裕子（2021）「学生はアカデミック・ライティングの何が難しいのか—大学初年次生のレディネス」春日美穂・近藤裕子・坂尻彰宏・島田康行・根来麻子・堀一成・由井恭子 渡辺哲司『あらためて、ライティングの高大接続—多様化する新入生、応じる大学教師』ひつじ書房, pp.87-99
- 近藤裕子・中村かおり・向井留実子（2017）「大学初年次のアカデミック・ライティング指導に向けたレディネス調査」『日本語教育方法研究会誌』24(1), pp.102-103
- 佐渡島紗織・太田裕子（編）（2013）『文章チュータリングの理念と実践—早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房
- 坪根由香里・鎌田美千子（2022）「大学の日本語教員養成課程で学ぶ大学生がライティング指導に感じる難しさ—PAC 分析の結果をもとに—」『大阪観光大学研究論集』22, pp.33-42

- 内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施法入門 [改訂版] — 「個」を科学する新技法への招待—』ナカニシヤ書店
- 中島祥子・村岡貴子 (2021) 「ライティング教育に関するピリーフ調査に向けての基礎的調査—韓国の大学の事例をもとに—」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』25, pp. 63-73
- 布施悠子 (2020) 「ライティング指導不安尺度開発の試み」『2020年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp. 109-114
- 文化審議会国語分科会 (2019) 『日本語教育人材の養成・研修の在り方について (報告) 改定版』文化庁
- 渡辺哲司・島田康行 (2017) 『ライティングの高大接続—高校・大学で「書くこと」を教える人たちへ—』ひつじ書房
- Lee, I. (2021) Future directions for writing teacher cognition (Writing teacher preparation and research). *The TESOL encyclopedia of English language teaching*, <https://doi.org/10.1002/9781118784235.eelt0563.pub2> (August 17, 2022)
- Yigitoglu, N. & Belcher, D. (2014) Exploring L2 writing teacher cognition from an experiential perspective: The role learning to write may play in professional beliefs and practices. *System*, 47, 116-124